

を同時に経験することができるのは幸せなこと」という考えに基づいた子育ての影響を受けているかもしれないと答えている。

将来のキャリアのために日本語が必要になったというよりも日本へのノスタルジアと帰属感、カナダ多文化主義に対するビリーフから、経営コンサルタントになって世界中を飛び回り日本に3~4年住むという日本に住む方法、日本語を学ぶ理由を作り出したようである。「International citizen」という理想に近づくために、それを現実の生活と繋ごうとした結果かもしれない。

4.2.2. 教室内学習・教師の役割

Shun はフォーマルな教室内学習を“real learning”という言葉で表している。言語習得には“real learning”が必要であり、これまでの家庭での日本語接触や使用はそれにはあたらないう。父親とは英語に日本語を混ぜてコミュニケーションを取っており、日本語でしか正確に表現できないような感情や感覚もあるというが、そのレベルに留まっており、それ以上上達することはないとしている。父親は彼が傷つかないようになるべく彼が知っている言葉を使い、間違えても訂正しないからだとして述べている。大学コースでは教科書や教師が新しい語彙や文法の情報、フィードバックを提供してくれるため、短いフレーズではなくきちんとした文で表現できるレベルになったという。父親とのやり取りなどの中で上達を確認・実感していた。また、日本語学習者としての自覚にも繋がったようである。

When I was taking a Japanese course I was doing everyday so I was getting quite good at it. But and then, since I wasn't able to take it this year, I realized that it's something that I have to do often. 'Cause even I haven't done it in maybe six months but I see that my Japanese is gone a lot worse than it was when I was doing the course. So, [...] I realized that I have to constantly be doing Japanese. (インタビュー, 2011年12月21日)

言語習得では、新しいことを学ぶと同時に既に学んだものを保持する努力も必要であることに気づき、継続的な日本語学習への意欲、学習者としての自立に繋がっている。日記の中で『一寸法師』の主人公が親元を離れ、都で新しいことを学んで成長して故郷に帰ってくることを挙げ、“Maybe I'm way off!”と述べており、キャリアプランにも見られるように、親からの自立の必要性を感じていたようである。日本語学習もそのような内面的成長と切り離されたものではなく、“real learning”に参加することによって日本語使用者としての自立を試み、親とは違う一人の日本語使用者としての方向性を見いだしはじめたと思われる。

4.3. Natsuo のケース

Natsuo は、現地で日系2世の父親とイタリア系カナダ人の母親の間に生まれた。父方の祖父母は日系移民で、カナダ西部からモントリオールに移動してきた。西部の大学院に通う姉が一人いる。データ収集時は実家を離れアパート暮らしをしていた。父親は幼少時に家庭での言語も英語に切り替えており、日本語はほとんど話せない。母親もイタリア語は全く話せず、家庭での会話は英語である。Natsuo はフランス語イマージョンの高校に通ったため、英仏バイリンガルである。日本には一度も行ったことがなく、大学卒業後に住んでみたいと述べている。

4.3.1. 日本語を学ぶこと・使うこと

アンケートで挙げられた日本語学習理由は、“To better understand the culture and to be able to communicate with other Japanese people”であった。Mayumi や Shun と同様にコミュニケーションを挙げているが、彼の場合は祖父母も日本の親戚との繋がりがほぼなくなっており、父親の代で日本語の継承が途切れている状況から、ここでいう「コミュニケーション」は家族や親戚とのものではない。しかし、自分も日本との繋がりがあり、“Japanese people”の中の一人であると感じていた。家庭での日本語使用は全くないとしていたが、「天狗になる」「外人」という言葉を使っており、祖父母から多少日本語のインプットを得ているようであった。また、メンタリティの面で父親には明らかに祖父から受け継いだと思われるものがあり、それは自分の中にも受け継がれていると思うと述べている。そのような受け継いだものや持っている日本文化についての知識が、本当のものであるのか日本に行って確かめたいと語っている。Shun と同様にカナダ人として自分のルーツを知ることの大切さ、親や祖父母とは別の一個人として日本文化を自分なりに理解することの必要性について語り、言語の重要性を強調している。

I think learning a language is essential to fully understanding a culture. I don't know if one can ever fully understand everything if there is always a language barrier in between.

(日記, 2012年4月11日)

日本語を学ぶこと、日本に住むことは彼にとっては日本文化を自分なりに理解するための手段のようであった。北米人は日本人と違って現状に満足せず常に上を目指す傾向にある、多文化であることがカナダ人であることと強く述べており、自分も日本語や日本文化を含め多くの言語や文化を理解するカナダ人になることを目指し常に努力するチャレンジャーでありたいと望んでいる様子が窺われた。

4.3.2. 教室内学習・教師の役割

データ収集時 Natsuo は大学のコースを受講中であり、テストの点や成績にストレスを感じていた。これは、自身の感じる上達が点数に反映されないことに対する戸惑いであった。評価方法自体には問題を感じていないが、授業や生活の中で明らかに上達したとを感じる場面があるにも関わらず、それが点数として表れるには小さすぎることに戸惑い、自分自身に苛立っている様子がインタビュー中のコメントに見られた。しかし、そのようなストレスにも関わらず、Natsuo は教室内学習の必要性を説いている。そこには自己理解や過去の言語学習経験が影響しているようであった。Natsuo は高校時代のフランス語学習も含め、過去のアカデミックな面での経験から、自身のことを「すぐに天狗になる」「敢えて難しいことに挑むチャレンジャー」「失敗しても前を見て進む」と分析している。教室内学習はそのような自分に必要な“push”であるとしている。大学コースでは宿題やテストがあり、他の学習者がいることで天狗にならずに学習でき、自分の好きなことだけやらずに新しいことにチャレンジできるとしている。また、きちんと学習せず安易に日本語を使う人に対して、強い嫌悪感を表している。

That [白人が安易に日本語を使うこと] annoys me. He is obsessed with Japanese language. I don't wanna be like that guy. (インタビュー, 2012年3月27日)

風貌から自身も白人と見られることが多いが、日本人ではない人があまり知らないのに日本語を使ったり日本文化に関する知識をひけらかしたりするのは格好悪

いと感じており、自分が周囲の人からそのように見られないよう努力していた。日本語を学ぶこと、それをコース受講という周囲の人の目に見える形で行なうことはその努力の一部と思われる。コース受講によって正統な日本語使用者というステータスを手に入れたと感じているようであった。一方、コース内のグループプロジェクトで起こった問題を通し、日本育ちの教師や調査者と自分、他のメンバーと自分との問題解決に対する考え方の違いに気づいたようである。そこから自身のメンタリティを日本のか否かという観点では表せないと感じ、「自分はカナダ人だと思う」と自分が多文化なカナダ人であることを再認識している。

4.4. Meg のケース

Meg は他の三人と異なりカナダ西部英語圏で育ち、大学入学をきっかけにモントリオールで一人暮らしを始めた。両親は日本からの移民で、弟が一人いる。父親は高校時代に他界しているが、母親に日本人の友人がいること、親戚が日本にいることなどから、日本との繋がりを保持していた。しかし、日本語学校で小学1年を繰り返した際の学校の対応に不信感を抱き、自己否定感を持つようになったようである。日本語使用を避けるようになり、家庭でも家族はある程度日本語を使って話す、自分は英語で答えるといった形でコミュニケーションをとるようになったという。現地校では、小学校5年まで英語の抽出授業を受けていた。

4.4.1. 日本語を学ぶこと・使うこと

Meg はアンケートでは、キャリア、東アジア研究の学位、家族や親戚とのコミュニケーションのためと日本語を学ぶことについて三つの理由を挙げている。これらの理由の背景には、多言語社会や大学文化との接触など環境の変化がある。現地は *social multilingualism* だけでなく *individual multilingualism* が進んでおり、複数言語話者の人口がモノリンガルよりも圧倒的に多い。Meg は相手に合わせて言語を切り替える彼らの生活を目の当たりにし、「かっこいい！自分もあんなりたい」と思うようになったという。

一方、最初は母親の友人に勧められて何となく選んだ東アジア研究であったが、授業で他の学生たちが情熱的に東アジア文化について意見を交わしたり、将来それらの地域に住んで研究したり働いたりするというキャリアプランを語ったりしているのを聞いて、自分も日本での生活に興味を持つようになったと述べている。

Japan is like, I'm just fascinated. Don't ask me why 'cause I don't know. [...] I talked to a lot of people in East Asian Studies. I want to go to Japan. So, I was kind of inspired.

(インタビュー, 2012年2月21日)

また、東アジア研究の建物やクラスでは常に日本語に囲まれていて、日本語を学ぶことが自然なことのように感じられてきたようである。高校時代のポジティブな英語の授業での経験も、日本語再学習のきっかけになったと述べている。

大学入学の際の環境の変化から、学術的にも日本を理解できる日英バイリンガルとして、相手や状況に合わせて言語間を行き来する複数言語話者コミュニティの一員になることを実現可能なこととして思い描くようになったと見られる。

4.4.2. 教室内学習・教師の役割

データ収集時、Meg は日本語コースを受講中であった。インタビューや日記のコメントからコースの様子や Meg のアイデンティティ構築への影響が窺われた。クラスでは特別に扱われることもなく、「普通」の大学生として振る舞うことができたと述べており、「継承語学習者」という枠組みや過去のネガティブな学習経験から解放されたようである。そして、学習内容や評価がはっきりと目に見え、それが現実の生活での日本語使用に反映されることで学習自体が Meg の中で内在化されていったようである。

I noticed that I get really happy when I recognize kanji and/or grammar structures I learned in class within the books. Applying things that I learned in class makes me feel like I am making progress; seeing the result of my studies is nice, too.

(日記, 2012年3月28日)

さらにコース終わりに近づくにつれ、複数言語話者コミュニティの一員となるという漠然とした目標が、どのような複数言語話者を目指すのか、複数言語話者であることの意味をどこに置くのかといったことも含めた具体的で現実的なものになっていった。そして、それを行動に移した自分に満足している様子が見られた。

I just wanted to add that I attempted to write a Mother's Day card in Japanese! I usually write them in English so this is probably my first time. [...] I felt quite proud. It is really rare for me to initiate anything in Japanese but I am more willing now than before I had started my language studies. I think I also wanted to show my mother my progress. Kind of short but I thought it was important.

(日記, 2012年5月14日)

年老いた祖母や日本語を無理強いしないでくれた母親に、自分から歩み寄って日本語でコミュニケーションをとることが、複数言語話者として重要なことと感じているようである。言語を使い分けることで、相手を思いやり、感謝の気持ちを伝えられることに複数言語話者であることの意味を見いだしていると見られる。

5. 考察

4名に共通して言えるのは、彼女らにとって日本語を学び、使うことは Need ではないということ、カナダ多文化主義の影響を受けていることである。多文化主義社会の中で成長してきた彼女らは、親から自立した将来の自分を思い描く時、必然的に自分と日本との繋がりに向き合わなければならず、その過程で日本語を学ぶことに自ら意味を見いだしてきた。Mayumi や Meg は、言語を使い分けることで相手への思いやりや感謝の気持ちを表せる複数言語話者になりたいと願い、日本語を学ぶことをその理想への努力、思いやりある人としての行動の一つと受け止めている。また、Shun や Natsuo は、グローバル化の進む国際社会の中で多文化主義に則った理想的なカナダ人として活躍することを目指し、日本語を学ぶことをカナダ多文化主義を実現する行動の一つとして位置づけている。そして、教室内活動で教師や他の学習者と学びの経験を共有することで、複数言語話者であることや多文化社会を目指すことの意味や価値をどこに置くのか、そのためにどのような行動を取るべきなのか考え、将来の自分の像をより具体的なものに描き直している。また、その新しい大学文化や人間関係の中で、親が持っている日本との繋がりとは別の親を介さない自分なりの日本との繋がりを探している。

Norton の「創造の共同体」「投資」という概念から、彼女らが複数言語話者や多文化社会の一員であろうとする姿を説明することはできる。しかし、彼女らのケースを見ると、対象言語との繋がりが親を通しての間接的なものであったり、幼少時から複数言語環境ですごしてきたりした「継承語学習者」の場合、なぜその言語を学ぶのかという個々の学習者の真実にできうる限り近づこうとするならば、既にある程度その言語と直接的な繋がりを構築した上で移動した成人移民や留学生とは異なり、思い描く「創造の共同体」につながる言語や言語学習の意味だけでなく、その意味づけに至るまでの人としての成長の軌跡も重要なものであることが分かる。「創造の共同体」「投資」という概念だけで理解しようとする、その部分が取りこぼされてしまう可能性があるのではないだろうか。

6. まとめ

調査の結果から、日本にルーツを持つ再学習者は成長と共に日本語学習を義務（過去との繋がりのみであったもの）から自由意思による将来に繋がるものに移行させるよう、日本語学習理由や日本語使用者としての自分のイメージを意識的に創造している可能性があること、大学コースや教師はその移行を支援するものと認識されており、日本語使用者として自立する前の研修の場やリソースとなっている可能性があることが分かった。コース開始前に「継承語（再）学習者」対象のワークショップを行うなど、成人クラスでの「継承語（再）学習者」の受け入れ体制を整える必要があると考える。しかし、今回データの多くの部分で、現地の多文化主義や多言語環境の影響が見られ、この結果を一概に全ての教育現場での実践に活用することはできない。今後、同一地域でより多くの事例を分析していくと共に、日本語教育を現地の全人教育の中に位置づけ、他地域との比較調査、教育現場での多文化主義や多言語環境の影響に関する調査も行っていきたい。

参考文献

- Dressler, R. (2008). *Motivation and demotivation in Heritage Language Learners of German*. M.A. dissertation, University of Calgary (Calgary), Canada.
- 川上郁男 (2013) 『「移動する子ども」という記憶と力』 くろしお出版
- 川上郁雄 (2014) 「第1部第5章ことばとアイデンティティ—複数言語環境で成長する子どもたちの生を考える—」 宮崎幸江 (編) 『日本に住む多文化の子どもと教育—ことばと文化のはざままで生きる—』 上智大学出版 117-144
- Kondo-Brown, K. (2000). Acculturation and identity of bilingual heritage students of Japanese in Hawaii. *The Japan Journal of Multilingualism and Multiculturalism*, 6, 1-19.
- Noels, K.A. (2009). The internalisation of language learning into the self and social identity. In Z. Dornyei and E. Ushioda (eds) *Motivation, Language Identity and the L2 Self* (pp. 295-313). Bristol, U.K: Multilingual Matters.
- Norton, B. (2000). *Identity and language learning: Gender, ethnicity and educational change*. Harlow, England: Longman/Pearson Education.
- Yoshida, R. (2001). *Political economy, transnationalism, and identity: Students at the Montreal Hoshuko*. Master's thesis, McGill University (Montreal), Canada.